

# アニメイター長野櫻子の仕事

花田伸一

(キュレーター／佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授)

長野櫻子は文字通りのアニメイターだ。対象にアニマ（魂、息、命）を吹き込む人  
筆者が長野の作品のうち実際に見ることができたのは、2023年9～10月 Artist  
Cafe Fukuoka（福岡市）での展示と、同11～12月万田坑芸術祭（熊本・荒尾市）で  
の展示。《○○[展示場所]のための○○[モニタの数]の視点》と題されたシリーズである。

この《視点》シリーズでは、いずれも室内各所に複数のモニタが配置され、それぞれのモニタの向かい側に見える事物や景色などの対象がアニメ化され、各モニタ上に映っている。つまり各モニタが鏡のような状態となって、それぞれの向かい側にある対象を画面上に映しだしている状態。

アニメ化の手法としては対象の輪郭をトレースした色面構成的な絵画を全く同構図で3枚作成し、それらを素早くリピートさせループさせている状態。モニタをパッと見ただけでは静止画だと勘違いしそうなくらい動画としては微細な動きで、よく見れば輪郭線がちらちらと僅かに揺れていることに気づく程度。

画面を構成する色彩はパステル調で落ち着いており、モニタ周囲の色にも馴染んでいる。室内各所に配置されたモニタの設置場所については、鑑賞者がすぐに気づけるものもあれば、見逃しそうなものもある。

描く対象の選択は、一見するに特にこれといった大きな特徴の無い、しかし、いざじっくり見てみると確かに趣のある味わい深い対象、あるいは造形的・社会的・歴史的にその場所をさりげなく象徴するかのような対象が選択されている。

つまり動き、色彩、配置場所、対象の選択、どれをとっても周囲との差異が微小で、おおよそ周囲に馴染み溶け込んでいるため、見る側にはよく注意して見るのが求められる。しかしながら緊張感もって背筋を伸ばして注視せねばという雰囲気でもなく、色彩的にも動機的にも、シリアスさというよりも、穏やかさや気取らなさ、ほんのりとしたセンチメンタルな感じも含め、どこかユーモラスな感じが醸し出されている。短絡的にはノスタルジックとの語で片づけられそうだが、私の印象では、その語に纏わりつくある種のウェットさにまでは至らず、とはいえドライとくくってしまうには微温がじわじわ伝わってくるという印象を抱く。

彼女の《視点》シリーズの空気感を言い表すとき、何気なさ、ささやかさ、ひそやかさ、控え目さ、といったキーワードが浮かんでくる。ここではこれらをいったん「ミニマルさ」と言い換えておいた上で、長野の作品空間では、サブジェクト（見る側、主体）とオブジェクト（見られる側、客体）の反転が起こっているのではないかと、という点を

論じてみたい。いや、反転とまでは言わず、混然一体とした融合、つまり中動態のような状態が生じていると言ったほうが適切かもしれない。

モニタ上に映されている無機物であるはずの対象（オブジェクト）は長野によってアニメを吹き込まれているため、私たちはその対象たちに生命を感じてしまう。言葉こそ交わせないが、何かひそやかに声をかけられている感じというか、心が通じあってしまったという感じを抱いてしまう感受性。そこで長野の表現の「ミニマルさ」がモノを言う。たとえばノイズ・ミュージックの爆音空間に身を置くとだんだん心が無になっていく（私だけ？）のとは反対に、微音で奏でられる演奏を聴くと全身の感覚が研ぎ澄まされ、自分が最大化されていく感覚を覚えるが、それは主体の肥大化というよりも主体と客体との融合といった方がふさわしい気がする。長野の作品はもちろん後者である。ぱっと見では見逃してしまいそうな種々のミニマルさゆえに、いったん気づいてしまうと、こちらの主体が引き出されつつ、ぐいとその世界に引き込まれ、主体と客体の融合が起こってしまう。

以上をふまえ、だから長野の仕事はアニミズムにおけるシャーマンのそれなのだ、と結論づけてしまいたくもなるが、それも短絡的すぎるというかロマンティックすぎる気もする。長野の仕事は根源的にはいつも宗教的ではあるが、「宗教」と言い切ってしまうと現代では変に偏った意味合いを持ちすぎるので、彼女の仕事が誤解あるいは曲解されそうだ。なので、ここではもう少し偏りの少なそうな「哲学」との語にとどめておこう。長野は現代における平場の哲学者である。長野の仕事は根源的にいつも哲学的だ。いや、確かにそうなのだが、「哲学」との語もまた現代においては無駄に偏った意味合いを持ちすぎる。ここではやはり、いかがわしさ、軽薄さ、無責任さも含め、良くも悪くも今のところ「アート」との語が含み持つ適当さ、いい加減さを採用しておこう。言語情報ではなく非言語情報を道具とする哲学者としてのアーティスト長野櫻子、この辺りが私の形容の限界だ。

私は現代のアーティストの仕事とはかつての宗教者・哲学者が担っていた役割を今に置き換えたものだと考えている。私たちは長野の仕事を通して、妙な偏りを持たされてしまった「宗教」や「哲学」との語にひそんでいるはずのアニメを新たな角度から見出そうではないか。そしてまた「アート」との語にひそんでいるはずのアニメを新たな角度から見出そうではないか。いや、そんな各ジャンルの奇妙な凝り固まりの解きほぐしよりも何よりもっと大事なものは、今を生きる私たちの日々の生活の場のそこかしこにひそんでいるはずのアニメを新たな角度から見出すことだ。長野がアニメイトしているのは私たちのアニメなのだから、つまるところ私たち一人ひとりがアニメーターになれば良い。私たちは一人ひとりがアニメイトされ、アニメイトする存在なのであり、人も事物も混然一体となってこの世界は響きあっている。

※ 1

長野櫻子《Artist Cafe Fukuoka のための 11 の視点》（会場:Artist Cafe Fukuoka Community Space、会期：2023 年 9 月 16 日 [土]-10 月 22 日 [日]）。『FaN Week 2023』（主催:Fukuoka Art Next 推進委員会、事務局：福岡市経済観光文化局文化振興部アートのまちづくり推進担当）内の企画展「福岡現代作家ファイル 2023」招聘作家として参加。会場の Artist Cafe Fukuoka は旧舞鶴中学校校舎を再活用したアーティストの成長・交流拠点施設として福岡市が 2022 年 9 月開設。

※ 2

長野櫻子《万田坑 職場のための 9 つの視点》。『万田坑芸術祭』（会場:万田坑、会期:2023 年 11 月 3 日 [金祝] -12 月 24 日 [日]、総合ディレクター：宮本華子、主催：荒尾市、事務局：総務部文化企画課世界遺産・文化交流室）招聘作家として参加。万田坑は明治～昭和初期の三池炭鉱の主要施設で 1951 年採炭終了、1997 年閉山、2015 年「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産指定。万田坑の「職場」と呼ばれた建物では坑内で用いる機械工具類の修理をしていた。